

F.シューベルト《魔王》の全4種類の稿についての分析

—改稿に着目して—

久保田 園 子

(本講座大学院博士課程前期在学)

1. 序

シューベルト (Franz Peter Schubert 1797-1828) の歌曲《魔王 Erlkönig D328》の楽譜は、現在さまざまな出版社から刊行されているが、この作品の改稿楽譜が全て掲載されているのは、Breitkopf & Härtel の Reprint の Dover 版¹や同じく Breitkopf & Härtel の Reprint の E.F.Kalmus ポケット・スコア²が挙げられる。その中でも、現在オリジナル史料として取り扱われている『シューベルト全集』は、「学術版」、「校訂版」として、原典版の研究に関して最も信頼性の高い出版物として位置付けられている。この全集には、旧全集『*Franz Schubert's Werke kritisch durchgesehene Gesamtausgabe.*』³と新全集『*Franz Schubert Neue Ausgabe sämtlicher Werke.*』⁴が存在し、その史料集の中で、シューベルトは《魔王》を4稿書き残していることがわかる。旧全集は、1884年にマンディチェフスキー (Eusebius Mandyczewsky 1857-1929) やブラームス (Johannes Brahms 1833-1897) 等の編集によって Breitkopf & Härtel 社から出版されている。史料楽譜中から、《魔王》の楽譜発行は1895年と記されていることがわかる。また、その一方で、新全集は旧全集《魔王》の発行から、75年後にデュル (Waither Dürr)、ファイル (Arnold Feil)、ランドン (Christa Landon) 等によって編集され、Bärenreiter 社から改編出版されている。この改編出版は、ドイッチュ (Otto Erich Deutsch 1883-1967) の執筆によるドキュメントや『*Thematischer Katalog aller Werke Schuberts in chronologischer Reihenfolge.*』の主題目録に沿った研究が行われ、1900年頃の研究水準に基づいて、シューベルトの時代背景や生い立ちや出版物の収集整理が行われて改編出版されているものである。

上記に述べた歴史的史料である、旧全集と新全集の全4稿の《魔王》の内容には、多様な相違記載が見られ、楽譜上の音楽表記や改稿の矛盾が見られる。そこで、本研究では、出版社によって異なる音楽表記の比較を追及することを目的とするのではなく、改稿の技法や構成内容から改変の真相を探ることに焦点をあてる。

2. 全4稿の比較

比較に用いる記号を、旧全集を〈A〉と略し、新全集を〈B〉とする。そして、改稿を重ねる毎に〈A-1、B-1…〉と数字を加算して示す。さらに、伴奏パート (Pf) をピアノ右手 (R)、ピアノ左手 (L)、歌のパートを (V) と記す。音高はドイツ音名表示を採用し、ハ音はc音で、上1点ハ音をc1、で表す。そして、各声部の詳細明記は、ソプラノ (S)、バス (B)、上声部 (S1)、内声部 (M)、下声部 (B1) と示し、単音 (a)、オクターヴ (o)、音や音楽表記の加わりを (+)、削除 (-) と記す。また、演奏記号のスタッカート (ス)、スタッカティッシモ (ス') とし、比較対照のない箇所、変化の無い箇所を (無) と記す。そして、記号では解りにくい箇所に楽譜を提示する。

2-1. 全4稿の相違点

表1 第1稿


版	〈A-1〉旧全集 第1稿	〈B-1〉新全集 第1稿
小節		
1	(R)1 拍を8分音符が三連	無
2,4,8,10, 129,131	(R)1 拍を付点8分音符で略譜 (L-B) d ,H (ス)	(R)1 拍を付点2分音符で略譜 (L-B) d ,H (ス')

3,5,9,130,132	(L-B)G (ス)	無
12,13	(L-o)スラー	(L-o)スラー無し
23,25	(L-B) f ,B (ス)	(L-B) f ,B の音 (ス')
27,29	無	(V)補足部として奏法を記す
29,30	(L-o)Es,C, d (ス)	(L-o)Es,C, d (ス')
32,34	(L-B) d ,H (ス)	(L-B) d ,H (ス')
48	無	(R-B1) f (-)
52	無	(V)前打音 es(+)
53	無	(L-B)B,F,D(ス')
63	無	(R-B1)F(-)
78	(L-B) e ,fis,fis(ス)	(L-B) e ,fis,fis(ス')
80	無	(V)前打音 a ¹ (+)
81	(L-B) e , c , c(ス)	(L-B) e , c , c(ス')
86	(V)4 分音符 e ¹ 	(V)8 分音符 a ¹ ,h ¹ 
93	(L-o)C, c	(L-a)C
93-95	(Pf)ダイナミックス 	(Pf) ダイナミックス 2 拍ずつずれる 
102	(L-B)fis,gis,gis(ス)	(L-B)fis,gis,gis(ス')
110,112	(L-B) a , f (ス)	(L-B) a , f (ス')
111,113	(L-a) d 8 分音符(ス)	(L-a) d 2 分音符
131,135	無	(V)付則部 
136	無	(L-B)スラー (+)

第1稿(表1)において大きな差異は、〈A〉版では付点8分音符を1拍として記載されているのに対し、〈B〉版では付点2分音符でブリレンベッセ法を行っている点に大きな特徴として挙げられる。また、両版とも音を短く切る場所は類似しているが、〈A〉版ではスタカートが用いられているのに対し、〈B〉版ではスタッカティッシモで音色の鋭さを強調して置き換えられている。



表2 第2稿

版 小節	〈A-2〉旧全集 第2稿	〈B-2〉新全集 第2稿
1	(R-o)1 拍に 8 分音符 3 つ	(R-o)1 拍に 8 分音符 2 つ
3,5,8,10,12,34,36	(L-B)G(ス)	無
6	(Pf)1 小節にクレシェンド	(Pf)1 拍目にクレシェンド
13,14	(L-o)スラー	(L-o)スラー(-)
17,19	無	(L-B)D アクセント
22,23	(L-B) e , f ,F(ス)	無
26	(V)前打音 c ² 8 分音符	(V)前打音 c ² 4 分音符
32	(Pf)1 拍目 pp	(Pf)3 拍目 pp
38	(Pf)1 拍目にクレシェンド	(Pf)3 拍目にクレシェンド
39	無	(L-B)G スラー(+)
40,42	(Pf)1 小節デクレシェンド	無
44	無 (L-B)音型 (+) 	(L-B) c アクセント (L-B) c 全音符 
45	(Pf)1 小節デクレシェンド	(R)1 拍目アクセント、(L)3 拍目アクセント
47	無	(L-B) f アクセント
55	(Pf) <i>decresc.</i>	無
69	(L-o)3 拍目	(L-a)3 拍目
76	無	(Pf)3 拍目 <i>decresc.</i>

77	(Pf)1 小節 <i>decresc.</i>	(Pf)3 拍目 <i>pp</i>
79	(Pf)2 拍目 <i>dim.</i>	無
80	(V)H 2部音符	(V)H 4分音符
95	(L-B)Cis スラー(+)	無
97	無	(L-o)cis,cis ¹ アクセント
100	無	(Pf)3 拍目 <i>decresc.</i>
101	(Pf)1 小節 <i>decresc.</i>	(Pf)3 拍目 <i>pp</i>
103	(Pf)2 拍目 <i>dim.</i>	無
104	無	(R-B)cis(+)
	無	(Pf)3 拍目 <i>cresc.</i>
106	(Pf)1 拍目 <i>cresc.</i>	(Pf)1 拍目 <i>f</i> アクセント
107	(V)D 付点2分音符	(V)D 2分音符
	無	(V)3 拍目 4分休符(+)
108	(L-o)G 全音符	(L-o)G,g 付点2分音符
117,118,119	(Pf)1 拍目 <i>fz</i> 	(L-o)1 拍目 <i>fz</i> 
126-128	無	(L-o)2 小節間隔に <i>fz</i>
129	(Pf)2 拍目 <i>p</i>	無
132	(V) a ¹ 前打音(+)	無
133	(Pf)4 拍目 <i>cresc.</i>	無
137	無	(Pf)1 拍目 デクレシェンド
139-140	(Pf)3 拍目 クレシェンド	無
140		(Pf)1 拍目 <i>cresc.</i>
141	(Pf) <i>ff</i> デクレシェンド	(Pf) <i>ff</i>
144	(V)2 拍目 フェルマータ	無
145	無	(V)全小節フェルマータ, (Pf)3 拍目フェルマータ

第2稿(表2)では、冒頭から伴奏部の音型が大きく異なりを持ち、それは最後まで続く。〈A〉版では、1拍に8分音符3連に対し、〈B〉版では1拍に8分音符が2つ置かれている。そのことから、〈B〉版ではピアノパートが簡略化されていることがわかる。また、デュナーミクの場所に幾つか異なる箇所が見られた。

表3 第3稿

版 小節	〈A-3〉旧全集 第3稿	〈B-3〉新全集 第3稿
1	(R-o)1 拍に8分音符2つ	(R-o)1 拍に8分音符3つ
3,5,8,10,12,34,36	無	(L-B)G(ス)
13,14	(L-o)S スラー	(L-o)スラー無し
17,19	(L-B)d アクセント	無
22,23	無	(L-B) es, f, F(ス')
26	(V)前打音 c ² 8分音符	(V)前打音 c ² 4分音符
28	無	(V)前打音 c ² スラー(+)
32	(R-o)g ¹ , g	(R)和音 b, d ¹ , g ¹
38	(Pf)3 拍目 <i>cresc.</i>	(Pf)1 拍目 <i>cresc.</i>
40	(Pf)1 拍目 <i>f</i>	(Pf)1 拍目 <i>f</i> アクセント
40-41	4拍 (Pf)(+) 	無 
43,48	(Pf)3 拍目アクセント	42,47 (Pf)1 拍目アクセント
45	無	44 (R-B) c ¹ (+), (R-M)ges ¹ (+)
46	(L-B)f アクセント	45 無
50	(Pf)3 拍目 <i>pp</i> アクセント	49 (Pf)3 拍目 アクセント
51	無	50 (Pf)1 拍目 <i>pp</i>

57	無	56	(L-B)F,F(ス)
65	(V)3 拍目 4 分休符	64	(V)付点 2 分音符
70	(L-B)3 拍目 C(a)	69	(L-B) 3 拍目c,C(o)
71	(L-B)F,F ¹ (o)	70	(L-B) F(a)
72,74	(L-B)4 拍目 スラー	71, 73	無
77-78	(Pf) <i>decresc.pp</i>	77	(Pf) <i>decresc.</i>
80	無	79	(Pf) <i>pp dim.</i>
81	(V)3,4 拍目 4 分休符	80	(V)3 拍目に 4 分休符
84	無	83	(L-B) d (ス)
85-86	4 拍 (Pf)(+) 	84	無 
86	(L-B)H ¹ (+)	84	無
91	(V)2 拍目 g ¹ , 4 拍目 gis ¹	89	(V)2 拍目 gis ¹ , 4 拍目 g
97,99,123,125	(L-B)4 拍目 スラー	95,97,121,123	無
102	(Pf) <i>decresc.</i>	100	無
103	(Pf) <i>pp</i>	101	(Pf) <i>decresc.</i>
106	(R-B)cis ¹ (+) (Pf) <i>cresc.</i>	104	無
107	無	105	(Pf)3 拍目 <i>cresc.</i>
109	(V)3 拍目 4 分休符	107	無
110	(L-B)4 拍目 g,G(+)	108	無
114,116	無	112, 114	(L-B) d (ス)
117	(Pf) <i>pp</i> 	115	(Pf) <i>ffz</i> 
128	(L-B) <i>fz, fz</i> 	126	無 
131	無	129	(Pf)3 拍目 <i>p</i>
133,135	無	131,133	(L-B)G(ス)
134	無	132	(V)前打音 a ¹ (+)
135	無	133	楽譜上部 <i>accelerando</i>
135-136	無	133,134	(Pf) <i>crescendo.</i>
138,140	(L-B)音形 (+) 	136,138	(L-B) o 
141-143	(Pf) <i>cresc. ff</i>	139,140,141	(Pf)クレシェンド <i>ff</i> , アクセント
146	無	144	(V)(Pf) 2 拍目 休符上にフェルマータ

第3稿(表3)では、冒頭から第2稿とは正反対で、〈A〉版は1拍に8分音符2つ、〈B〉版は8分音符3連で書かれてある。そのことから、大きな特徴である簡略譜は双方の2稿と3稿が反対であることがいえる。他に、大きな差異として小節数の増加があげられる。〈A〉版では、ピアノパートに数小節挿入が見られ(40-41,85-86小節)、歌のパートには休符(65,81小節)が増加している。デュナーミクでは、ピアノパートの117小節、128小節で、音色の大きさの違いを読み取ることができる。それは、これまでの第1稿、第2稿の技法の違いには無かった新たな大きな相違点の1つだといえる。

表4 第4稿 (Op.1)

版 小節	〈A-4〉旧全集 第4稿	〈B-4〉新全集 第4稿
1	(R)1 拍を8分音符が三連	無
2	(L-B) <i>f</i>	無
7,44,80,86, 105,112,139	(Pf)1 小節デクレシェンド	(Pf)1 拍目アクセント
13-14	(L-o)S1 スラー	(L-o)S1 スラー無し
24,26,28	(L-B)F アクセント無し	(L-B)F アクセント(+)
28	無	(V)前打音 C スラー(+)
41	(Pf)pp()付け	無
67	無	(V)4 拍目スラー(+)
72	(Pf)3 拍目 <i>f</i>	(Pf)1 拍目 <i>f</i> アクセント(+)
72-73,74-75, 97-98,99-100	(L-o)B1 スラー	無
108-109	(L-o)S1 スラー	(L-o)B1 スラー
114,116	無	(L-B)D(ス)
125	無	(V)1 拍目スラー(+)

最終稿(表4)では、大きな差異は見られなかったが、デュナーミクの置き方に違いがあった。〈A〉版は、小節内いっばいに提示してあるが、〈B〉版では小節の頭や音符の1拍目、2拍目までの記載が行われているという特徴が見られた。その内容を(譜例1)に記す。

譜例1

A 版 (6-7 小節)	B 版 (6-7 小節)	A 版 (85-86 小節)	B 版 (85-86 小節)

以上の比較から、大きな差異は双方の第2稿と第3稿で見られた。それは、この曲の大きな特徴に値する、馬の走る音を模倣した伴奏部の簡略化である。この簡略化は、〈A〉版では第3稿(Dritte Fassung)で扱われ、〈B〉版では第2稿(Zweite Fassung)で扱われていたという矛盾が見られた。これらは、楽譜資料(譜例2, 3)から読み取れる。

譜例2

〈A-3〉

譜例3

〈B-2〉

2-2. 友人達の回想から検証

《魔王》の成立について、ヨーゼフ・フォン・シュパウン(Josef von Spaun 1788-1865)の記録では、初稿について、「1815年のある午後のこと、(省略)その晩のうちに『魔王』が歌われ、感激をもって受け入れられた。」⁵⁾と記している。また、アルベルト・シュタードラー(Albert Stadler 1794-1888)は、「1815年晩秋に彼が両親の家で書いた『魔王』があります。」⁶⁾と証言している。そのことから、1815年に初稿が生まれた証言が一致し、両版とも同じ年を明記している。そして、第4稿が出版された記述に関して、ヨー

ゼフ・フォン・ヒュッテンブレンナー (Josef von Hüttenbrenner 1796-1873) は、『魔王』は、まず 1821 年 4 月 2 日付の『ヴィーン新聞』に、カッピ・ウント・ディアベリ社から出版された旨広告が出ています。』また、「1821 年 3 月 7 日ケルンテン門劇場で演奏。(省略) 彼はこのコンサートで、『魔王』を歌うフォーグルの伴奏をしました。」⁸ と証言している。この時、演奏会に用いられた稿は第 4 稿と称されている⁹。また、レーオポルト・フォン・ゾンライトナー (Leopold von Sonnleithner 1797-1873) は、「1821 年 2 月に『魔王』を印刷させました。(省略) 自費印刷し、ディアベリに委託販売させたのです。」¹⁰ と語っていることから、1821 年春に出版されたことがわかる。そのことから、初稿と最終稿の作曲年数は友人達の証言の一致から理解できるが、第 2 稿と第 3 稿を明らかにすることは不可能であった。

2-3. デュナーミクに着目して

デュナーミク技法は全総譜の歌唱パートには存在せず、伴奏部のみに明記されている。また、版の変化を見ると和声に変更はなく、デュナーミクの変化が見られる。そのことから、デュナーミクは改稿を探る作曲技法の変化において、重要な要因となっているのではないかと考えた。

伴奏部のデュナーミクを全版の初稿から最終稿までを比較してみると、第 4 稿ではデュナーミクが巧みに使われている。アゴーギク記号を見ると(譜例 4)、〈B-3〉133 小節に“*accelerando*”が記載されているのに対し、〈A-3〉では記されていないことがわかる。したがって、双方の第 3 稿は類似していないことが読み取れる。

譜例 4 *accelerando* 記載比較

譜例 4 は、6つの楽譜断片を比較しています。各断片は、楽譜の上部に「〈バージョン〉 小節」の形式でラベルされています。楽譜には、声楽パートのメロディとピアノの伴奏が示されています。各断片の下部には、歌詞が記されています。楽譜には、*accelerando* の記号が特定の小節に付与されていることが確認できます。

また、“*accelerando*”は、〈A-4〉と〈B-4〉、〈A-2〉、〈B-3〉および〈B-2〉には記載されているが、〈A-3〉には記載されていない。このことから、〈A-3〉のみが異なりをもつことになる。

譜例 5 *fermata* 記載比較

譜例 5 は、8つの楽譜断片を比較しています。各断片は、楽譜の上部に「〈バージョン〉 小節」の形式でラベルされています。楽譜には、声楽パートのメロディとピアノの伴奏が示されています。各断片の下部には、歌詞が記されています。楽譜には、フェルマータの記号が特定の小節に付与されていることが確認できます。また、矢印で「一致」と記されている箇所も示されています。

次に、〈B-3〉144 小節(譜例 5)にフェルマータが記載されており、〈A-2〉144 小節、〈A-4〉と〈B-4〉の 147 小節にも記載されている。しかし、〈A-3〉と〈B-2〉は記されていないことから、双方は同じ稿ではないことが考えられる。また、第 4 稿では、両版ともフェルマータが使用されているが、〈A-1〉と〈B-1〉の初稿には記されていない。仮に、第 4 稿では、両版ともフェルマータを採用していることから、前稿でも使用していたのではないかと推察してみると、第 3 稿は〈A-2〉と〈B-3〉であると考えられることができる。

譜例6 decresc.記載比較

〈B-3〉 55 小節	〈A-2〉 55 小節	〈A-4〉 56 小節	〈B-4〉 56 小節	〈A-3〉 56 小節	〈B-2〉 55 小節

前述の考え（譜例5）とは反対に、（譜例6）中の〈B-3〉の55小節目に“decrrsc.”が記載されており、同様に記載されているのは〈A-2〉のみである。しかし、第4稿では記されておらず、〈A-3〉、〈B-2〉ともないことから、第4稿の手法に近い〈A-3〉と〈B-2〉が第3稿ではないかと考えることができる。つまり、（譜例5）で推察した判断結果とは逆の見解がうまれた。

譜例7 フィナーレ部分のデュナーミク比較

〈A-3〉 141-146 小節	〈B-2〉 139-144 小節
〈A-2〉 139-144 小節	〈B-3〉 139-144 小節
〈A-4〉 141-147 小節	〈B-4〉 141-147 小節

次に、この作品のフィナーレでは幅広いデュナーミク記号が使われ（譜例6）、クライマックスを描いている。この箇所では、〈A-3〉と〈B-2〉が類似し、〈A-2〉と〈B-3〉が類似している。〈A-4〉と〈B-4〉は、141小節から147小節にかけて“<→ff→fp>→pp→p→f”で書かれており、〈A-3〉と〈B-2〉では、“crescend.→ff→記号無し→記号無し→p→pp”である。そして、〈A-2〉と〈B-3〉では、“<→ff>→記号無し→記号無し→p→pp”であった。大きな違いはないが、〈A-3〉と〈B-2〉に比べ、〈A-2〉と〈B-3〉は全体的にデュナーミクの使用幅が拡大していることがわかり、さらに第4稿では巧みにデュナーミクが使われていることがわかる。このデュナーミク比較から、改稿を重ねるごとに伴奏部の拡大が行われたのではないかと考えると、〈A-2〉と〈B-3〉が第3稿であると推測できる。したがって、〈A-3〉と〈B-2〉を第2稿に置き換えることができ、簡略を行った稿は第3稿であることがいえるであろう。また、デュナーミクの対照や伴奏部の拡大は、改稿順を解くには重要な要素であると考えたが、決定的な根拠とはならない。

3. Bärenreiter 社が提示する資料から検証

Bärenreiter 社（以下：Bärenreiter）は、あらたに修正を加えて新全集として出版したのか、Bärenreiter が提示する資料と、シューベルト伝記を相互に照合させ、改稿順の検証を行った。

3-1. 初演の矛盾

《魔王》の初演の証言に対し、Bärenreiter は、シュパウンの証言とラントハルティンガー（Benedikt Randhartinger 1802-1893）の証言が矛盾していることを指摘し、ラントハルティンガーが初演に用いた稿は3番目である可能性が高いことを最初に述べている¹¹。シュパウンは、初演について、1858年にルーイブ（Ferdinand Luib）に宛てたスケッチの中で、「1815年のある午後のこと（省略）」¹²と《魔王》が誕生した記述を残している。その一方で、ラントハルティンガーの初演の証言は、「『魔王』の原稿を持って来て、当時14歳の少年だった私にそれを歌うように頼んだ。」¹³、また、その時にシューベルトは簡略を行ったことを語っている。このラントハルティンガーの証言中にある「当時14歳の時」に着目すると、初演は1816年に行われたことになり、2人の証言に矛盾が生じているといえる。

また、《魔王》の誕生説や、作曲年数からの検証結果から、初稿は1815年であることが明らかであり、ラントハルティンガーの証言する初演時に用いた稿は、1815年に作曲された初稿とは必ずしもいいきれない。よって、初演はシュパウンが証言した1815年に行われたことが有力な情報になることがわかる。

3-2. ゲーテへの送付に着目

ピアノ伴奏部の音型の簡略化を旧全集では3番目と伝承してきたが、後にこれをBärenreiter は2番目と決定付けている。その背景について、Bärenreiter は「ラントハルティンガーは最初の版を何度もゲーテへ送ったことが報告から分かった。確かにシューベルトは後に幾つかの修正を採用したが、まちががなく、最初に彼は歌曲冊がゲーテから戻ってきた後であり、それをゲーテは2回とも重要な版ではないと評価している。（省略）この修正について、おそらくミヒャエル・フォークはオリジナルに変化が欲しかったのである。」¹⁴と修正したことについて記している。そのゲーテへの送付は、1816年4月にシュパウンの手によって送られている¹⁵。この送付についてBärenreiter は、「最初の歌曲冊はゲーテのために1816年4月に送付された。」¹⁶ことを記し、その送付内容から、《魔王》は第2稿であることがわかるが、自筆譜の内容を読み取ることはできない。しかし、これまでの資料から、ゲーテから最初に戻ってきた後に簡略譜が誕生したというBärenreiter の証言を仮定すると、1816年4月以降にシューベルトが伴奏部の簡略化を行ったことになり、第3稿以降に簡略を行ったことになるであろう。また、シュパウンは、1817年4月18日に再び出版計画を行い、今度はライプツィヒのBreitkopf & Härtel社（以下：Breitkopf）に送るが失敗に終わっている¹⁷。さらに、ゾンライトナーの証言によると、1819年か1820年にシューベルト自身がゲーテへ宛てて歌曲冊を送ったが、ゲーテからの返事はなく失敗に終わっている¹⁸。これらの出版計画は最終的に全て失敗に終わり、1821年に2月にCappi & Diabelli社（以下：Cappi）へ委託販売をする結果となる¹⁹。

以上の伝記資料から、《魔王》の出版計画は4回行われたことになる。そして、ゲーテへの送付以降である1817年の計画で、第3稿に簡略が施されたと仮定すると、1816年の初演時に簡略が行われたと証言するラントハルティンガーの言葉と一致しない結果となる。そして、1819年の出版計画は、Op.1と出版される前の計画であることから、第2稿ではなく第3稿を用いた計画であると推察でき、この第3稿は、簡略譜ではない可能性が高いと考えられる。よって、1816年4月以降から1819年以前に簡略譜が生まれたと想定することができる。

さらに、ラントハルティンガーの初演時の証言に着目すると、「『魔王』はアンコールされなければならなかった。（省略）二度目にはシューベルトは三連音を省略して八分音符に置きかえた。」²⁰とラントハルティンガーは述べている。この初演時の証言に着目すると、簡略化は次の第2稿に施されたことが推察できる。そうすると、1816年4月にシュパウンがゲーテへ送付した楽譜は、第2稿の簡略譜であることがいえよう。そして、1817年4月にBreitkopfに送られた楽譜は第3稿と考えることができ、1819年か1820年にシューベルト自身がゲーテへ送付した楽譜は第4稿になるであろう。しかし、Bärenreiter の資料では、最初にゲーテから返送された後に、変更が行われたであろうと記していることから、1816年4月以降にゲーテ宛へ送付した第2稿は簡略譜ではなく、1817年の第3稿が簡略譜とになり矛盾点を招く結果となる。しかし、この変更は逆に考えると、簡略譜から3連音符に置きかえたのではないだろうか。つまり、1816年4月の第2稿の簡略譜から、1817年に第3稿の3連音符に変更されたと推察することもできる。

3-3. 楽譜の所蔵場所

Bärenreiter が「最初にゲーテから返送された後に変更した。」と提示した内容の矛盾点について、1978 年に Bärenreiter から出版されている書物²¹から第 2 稿と第 3 稿の楽譜の所蔵場所を探ると、簡略譜の自筆譜を明らかにすることができる。それは、ドイッチュの証言が矛盾していることを示すことに繋がった。ドイッチュは、「シューベルトが伴奏音型の簡素化を行ったのは、1816 年になってから『魔王』の第 3 稿においてである。彼が 1817 年にラントハルティンガーに譲った第 2 稿は、現在ニューヨークのハイネマン財団にある。」²²と述べているが、現在ニューヨークのハイネマン財団にあるのは第 3 稿であり、簡略譜ではない。これらの楽譜の所蔵場所から考察すると、ドイッチュの証言と一致するには難しい結果となった。

4. 結

これまでの考察から、1815 年に初稿が生まれ、1816 年に第 2 稿へ簡略譜に変更され、その楽譜は同年 4 月にシュパウンからゲーテへ第 1 回目の送付が行われたことになる。そして、第 3 稿では 3 連音が再び採用され、第 4 稿でデュナーミクが多彩に採用されて 1821 年 4 月に出版された経緯が秘められていたことになった。この改稿経緯に従うと、Bärenreiter の記述の矛盾²³を解明することができた。それは、1821 年 3 月のフォーグル (Johann Michael Vogl 1768-1840) の試演時に、シューベルトが 3 連音を省略して 8 分音符に置き換え、その修正は第 3 稿の上ではなく第 2 稿の上に変更を挿入したことである。このことについて着目すると、第 4 稿は 1821 年 2 月に出版計画が行われたことから、楽譜はこの試演時には存在しないことになるであろう。そして、第 3 稿は、1817 年に Breitkopf へ送付されたが失敗に終わり、自筆譜はそのまま返送されなかったと想定することができる。そうすると、1816 年にゲーテから返送された第 2 稿がシューベルトの手元に残っていたと考えることができる。このように推察すると、止む得なくシューベルトは手元に残った第 2 稿の上に変更を加えることになるであろう。それは、フォーグルの初演時にシューベルトが修正を加えた簡略譜と一致することになる。また、Bärenreiter は、この 1821 年の試演時に、シューベルトは拍節やいくらかのデュナーミクを挿入させたが、その変化は第 4 稿の前にも同じような変化があったのではないかと予見している²⁴。このことから、デュナーミク記号はこの作品において、前稿を考察する重要な手掛かりになっていたといえる。それは、筆者が本研究で、楽譜の比較や検証を行った考察と同様な手法で、改稿順を明らかにしたことがわかる。しかし、これまでの考察結果から改稿順を確認もって言えない根本的な原因は、自筆稿が明確な日付で今日まで保管されていないことにある。それは、シューベルトの自筆譜は行方不明になっていることが多いことが挙げられる。また、友人達の証言から、シューベルトは五線譜の上に書く習性は低く、友人達へ簡単にプレゼントをしていた背景がある²⁵。それは、シューベルトが楽譜に対する価値や執着が低く、自らが十分に管理できる堅実な性格ではなかったことが伺える。そのような背景から生まれた自筆譜が、行方不明になってしまうのは自然なことかもしれない。また、シューベルト時代の写譜には、用途に応じた複数の性格を伺うことができる²⁶。それは 4 つの要因から影響していると考えられた。1. 筆写者が手写本の細部に多少の変更を加える。2. 筆写者が不注意で誤って記載する。3. 愛好家が自分の楽しみのために、自分の演奏能力の範囲内と見られる曲目を選び筆写を行う。4. 聴衆や楽譜収集家、演奏者の需要に応じて演奏用に変更する。以上の要因が含まれていたとすると、手稿資料に差異が現れたことが理解できる。また、現在オリジナル版とされている楽譜が、高い信頼性を持った楽譜なのであろうかと疑問を抱き、オリジナルだと断言するには不安な要素が混在していると考えられた。つまり、それはオリジナルとされている今日の改編楽譜の内容に異なりが存在することが理由に挙げられるからである。しかし、本研究では異なる史料の内容構造を正すことではなく、シューベルトが改稿を重ねた背景に見られる技法の改変が、シューベルト自身の評価や出版にまつわる評価に影響していたことを挙げるができる。これらの改稿の出版や写譜は、シューベルトの背景的側面の反映から作品を理解する重要な要素となるであろう。また、改変出版した Bärenreiter の資料だけではなく、旧全集を出版した Breitkopf からの資料も取り入れて総括的に分析することが必要であり、今後の課題としたい。

<注及び引用・参考文献、参考楽譜>

¹ Schubert, Franz. *Complete works: Breitkopf & Härtel critical edition of 1884-1897 V.14*. New York: Dover, 1967

- ² Schubert, Franz. *Franz Schubert Kalmus Miniature scores*. Edwin F. Kalmus, 1971
- ³ Schubert, Franz. *Franz Schubert's Werke kritisch durchgesehene Gesamtausgabe*. Breitkopf & Haertel, 1894-1895 (reprint, 1965)
- ⁴ Schubert, Franz. *Franz Schubert Neue Ausgabe sämtlicher Werke*. Bärenreiter, 1970
- ⁵ ドイツユ, O. E. 編 石井不二雄訳『シューベルト 友人たちの回想』白水社 1978 p.159
〔Deutsch, Otoo Erich. *Schubert Die Erinnerungen seiner Freunde*. Breitkopf & Härtel, Leipzig 1966〕
- ⁶ 同書 5、p.179
- ⁷ 同書 5、p.88
- ⁸ 同書 5、p.93
- ⁹ 同書 5、p.229
- ¹⁰ 同書 5、p.131
- ¹¹ Dürr, Walther. *Neue Schubert-Ausgabe, Serie Lieder Band 1 • Teil a*. Bärenreiter, 1970 p.xix
- ¹² 前掲書 5、p.159
- ¹³ 前掲書 5、p.246
- ¹⁴ 同前書 11、p.xx
- ¹⁵ 前掲書 5、p.56, p.74, p.149, p.191
- ¹⁶ Aderhold, Werner. Dürr, Walther. Feil, Arnold. Landon, Christa. ed. *Franz Schubert Thematisches Verzeichnis seiner Werke von Otto Erich Deutsch*. Bärenreiter, 1978 p.54
- ¹⁷ ドイツユ, O.E 編 實吉晴夫訳『シューベルトの手紙』メタモル社 1997 p.42
〔Deutsch, Otoo Erich. *Schubert Die Dokumente seines Lebens*. Bärenreiter, 1964〕
- ¹⁸ 前掲書 5、p.137
- ¹⁹ 前掲書 5、p.131
- ²⁰ 前掲書 5、pp.246-247
- ²¹ 同前書 16、pp.198-199
- ²² 前掲書 5、p.248
- ²³ 前掲書 11、p.xx
- ²⁴ 前掲書 11、p.xx
- ²⁵ 前掲書 5、pp.178-179、pp.264-265、同前書 17、pp.94-95
- ²⁶ 柴田南雄、遠山一行監修『ニューグロヴ世界音楽大事典別巻 1』講談社 1995 pp.173-185
〔Stanley, Sadie et al. *The New Grove Dictionary of Music and Musicians. supplementary vo.1*. Macmillan Ltd., 1980〕